

季刊 連句 第40号



連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判
三五二頁
三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

現代俳句鑑賞辞典 二八〇〇円

水原秋桜子編 二八〇〇円
結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重宝なし

大後美保編 二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉やスモック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一六〇〇円

国語慣用句大辞典 B5 大2 一六〇〇円

国語慣用語辞典 B5 大2 一六〇〇円

国語史辞典 B5 大2 一六〇〇円

日本語源辞典 B5 大2 一六〇〇円

京都語辞典 B5 大2 一六〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 大2 一六〇〇円

隠語辞典 B5 大2 一六〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B5 大2 一六〇〇円

明治新語俗語辞典 B5 大2 一六〇〇円

難訓辞典 B5 大2 一六〇〇円

名乗辞典 B5 大2 一六〇〇円

名数数詞辞典 B5 大2 一六〇〇円

あいさつ語辞典 B5 大2 一六〇〇円

新版 こぼ遊び辞典 B5 大2 一六〇〇円

類語辞典 B5 大2 一六〇〇円

類義語辞典 B5 大2 一六〇〇円

表現類語辞典 B5 大2 一六〇〇円

新版 文章表現辞典 B5 大2 一六〇〇円

芭蕉の心法 (南柏雑記 38)	1
朧夜と朧月	東 明雅 ... 2
歳旦三つ物	4
「灰汁桶の」の巻鑑賞	東 明雅 ... 9
「馬追」付勝練習二十韻	東 明雅 ... 12

第7回国民文化祭 石川92連句大会	文 下鉢清子 ... 14
応募入選作三巻 捌・文 倉本路子・八角澄子・百武冬乃	
当日作品七巻 捌 東 明雅・秋元正江・内田麻子・式田和子	
中川 哲・福井隆秀・本屋良子	

二十韻三巻 捌 松本 碧・佐古英子・山口美恵 ...	21
芦丈翁俳諧聞書 (VII)	22
百韻「霜月や」 捌 坂本孝子	24
歌仙二巻 捌 杉江杉亭・式田和子	26
二十韻三巻 捌 秋元正江・中田あかり	28
新刊紹介	20
雁帛往来	29

表紙 (軍鶏) 宮崎龍火子

芭蕉の心法
南柏雑記 38
雅

この号の二十二頁「芦丈翁俳諧聞書(VII)」を読まれる方は、芦丈先生が「芭蕉の心法」というものを、俳諧(連句)の最も重要な理念と考えられていたことに気が付かれるだろう。私は昭和三十六年から四十三年まで、まる七年余、先生の薫陶を受け、鉗槌をいただいたが、その間、心法という言葉を口にされない日はなかったと言ってよい。本当に耳に胼胝が出来るように繰り返し繰り返し教えられた。ただ、私は不敏でその真意を完全に解することが出来なかった。現在でも出来ないのである。先生の言われる「芭蕉の心法」とは、付けと転じと両方にあるらしく、付けの方では「あるものは付く、無いものは付かぬ」という心得であり、もう一つは「根を切れ、その続きをいうな」という教えであるように思われる。それは分るのであるが、転じについて、例の「付方自他伝」の方法を絶対とせず、「芭蕉様は心法によって自由に付けておられる。自分が何句続こうが、場の句が何句続こうが、打越からの転じがしっかりしていればそれでよいのだ」という教えであった。

私は連句を人にお教える時は、全く芦丈先生の言われた通りを教えて来た。だから、付け方の心法はその通り、

「あるものは付く、無いものは付かぬ」「根を切れ、その続きをいうな」と教えて来たが、転じの方法については、私がまだ芦丈先生に及ばないので、芭蕉は何を規準として心法を使ったか、まだ十分納得がいけない。だから、今まで転じの心法は無視し黙って来た。これは師に対して不忠実であったかも知れないが、私としては自分で納得のいかなぬことを他人様にお教えることはできないからである。

「付方自他伝」は私の考えでは、その方法は既に貞享のころ芭蕉たちは会得していた。それを元禄二年「おくのほそ道」の旅の途中、北枝に授け、北枝はその後三年かかってうまく整理をしてあのような形になったのであると思う。だから芭蕉は生前、あの方法を十分会得し、駆使していた。ただ、その方に泥まなかっただけである。

私としても決して「付方自他伝」の方法通りが絶対だとは言わないし、また、自・他・場の句の判別にも相当幅をもたせ、余裕を持たせているつもりである。しかしながらこれほど、手軽に三句の転じの出来る方法を外には知らないし、また馴れたせいとか、一巻の進行にあたって自他場の問題で窮したことは滅多にない。

蕪村や几童などの名人も盛んにこの方法を用いて立派な作品を作ったのである。私は真に「芭蕉の心法」が理解できるまでは、自分も「付方自他伝」を守り、他人様にもこれを教えずに行こうと思っている。

朧夜と朧月

東明雅

古典俳文学大系一「享保俳諧集」を読んでいるうち、次の作品があることを発見した。

朧夜をひとりさめてや梅の花

雲裏坊

木の芽も覗く柴垣のひま
柏木の衣紋に猫も恋をして

ひとつ呑ねばならぬ所なり
くまどりに月の出しやうとやかくと
もふ来かゝりてござる聖霊

朧夜をうごいて見たる柳かな

陸羽

沈々ひびく橋の雪水

山紫

むらさきの蒲団に馬も二節して

南淑

自慢も親の身では尤

羽

月も今盛の辻に踊かけ

紫

西瓜も錦とぼす行灯

叔

九重の雲に道あり山ざくら
帰り急ぎの雁も追く

廬長
許三

豆腐屋の門を朧に出替りて

杏里

きのふ笑ふた顔のはづかし

名月の十六日も七日も

秋の蓮の水におさまる

枚丈

桃波

池了

右の三作品は、いずれも享保二十一年自序、廬元坊撰の「涇江話」に掲載されているものである。廬元坊は美濃派獅子門第三世、支考の後継者として、生涯を捧げ、美濃派の今日を築いた人である。

私はつい最近「ねこみの通信」第十号の、質問コーナーで、標題に関連した文章を書いたばかりであるが、問題はやや重要と思われるので、この「涇江話」で発見した資料をまじえて再論してみる。

「ねこみの通信」の問答の要点を示すと、「朧夜」だけで月の句として使えるか否かという問に対して、私は七部集の用例をあげて、「朧夜」だけでは春の月を出したことになる。必ず「朧月」とか「月朧」と言わなければならぬとお答えした。

七部集で「朧」或は「朧夜」だけで春の月になっている例がないことと、特に「冬の日」・「狂句こがらしの」の巻

の名残の表、折立に「のり物に簾透顔おぼろなる」とあるのに対し、月の定座に「日東の李白が坊に月を見て」という句が存在しているのが、何よりの証拠だと思っていた。だから、冒頭に掲げた「涇江話」の例を見つけた時は本当に嬉しかった。これですくなくとも享保時代の頃までは、「朧夜」と「朧月」とを一緒にするようなことはなかったと断言できるだろう。

私は考えるに、享保時代までの歳時記には「朧夜」という季語は掲載されていない。「朧月」と「朧夜」が並んで始めて掲載されている「俳諧小笈」は寛政六年刊であり、「季引節用集」は文政元年の序があるが、この書では「朧月三春」「朧夜同」「朧影同」としてある。このあたりから、「朧月」と「朧夜」の混乱・乃至混同がおこったのはなからうか。角川の「図説俳句大歳時記」は流石に「朧月」と「朧」は別のものとしているが、「朧月夜」は傍題

として「朧夜」をあげ、山本健吉著「基本季語」は「朧月」の項に、「朧夜」・「月朧」・「朧月夜」・「淡月」を挙げ、御丁寧にも、解説文の最後に「朧夜は朧月夜のこと」と明記してある。これでは「広辞苑」や「日本国語大辞典」が同じようなことを書いていても咎めだては出来ないであろう。

このような場合、私もほどのような態度を取るべきか。「朧夜」と「朧月」、あるいは「朧月夜」があれだけはっきり区別して使われていたのに、ちょっとしたきっかけから誤用されて、同一物と見られるようになってしまった。そして、その誤用が世の大勢を占めている。私はあくまでも、「朧夜」と「朧月」・「朧月夜」の区別を守りたいと思うが、大衆に説いても無駄なような気がする。しかし、すくなくとも猫養の中では「朧夜」と「朧月」を混同しないようにしたいものだ。

全国連句いなみ大会募吟

形式 歌仙 〆切 三月三十一日

932-02 富山県井波町総合文化センター内

全国連句いなみ大会事務局 宛

皆さん奮って応募して下さい。

歳旦三つ物

繭玉や惣三階の残る町
花喰鳥の点初の盃
星朧いさり火とほく眺めゐて

秋元正江

初茜胡弓弾く音のまぼろしか

岩井啓子

久々の日本で浴びる初湯かな
拾ひし猫の愛称は「独楽」
アトリエの白蓮の花天向きて

秋元和彦

これからは己れが大事初参り
空に昼月かかる若菜野
鶯の籠を窺ふ猫のゐて

市野沢弘子

ねむるごと籠もるさとより年始状
とりと羽子板児らが描きし絵
トイバルーンはつ虹の橋わたるらん

浅賀淑代

若菜野の空は晴れたり摘み行かな
淑気凝りたる大盃の酒
移り行く尽きぬ風雅と花の色

岩垂景翠

門松に遊ぶ雀のみえ隠れ
東雲映ゆる桶の若水
父は百母は米寿のお花見に

稲葉道子

東大紅鋭く鳴きぬ初明り
漁始とやとほき舟影
花訪はむ奥の細道果もなし

内田麻子

健やかに重ぬる年や初日の出
祝ふお雑煮山海の幸
紅枝垂古都の社に咲き満ちて

小野シズ

電線に番ひの鳩や初御空
なせばなるなり鳴りしほっぺん
晩学の身に鞭打たん物芽出て

小林千雪

氏神や家族うちつれ初詣
春衣みせあひ笑顔絶えぬ子
恋猫の寝れも見せず浮かれでて

加藤治子

高らかに時告ぐ鳥や初御空
はや若水を汲める厨辺
春拾ひと日は優し妻ならん

倉本路子

大漁旗笑ふ魚港のお正月
テトラポッドを洗ふ若潮
春炬燵機械に強き夢を見て

加藤道子

神鶏の声の朗らや大旦
破魔矢を抱く振袖の胸
旅便りリラの押花こぼれ出て

上月淳子

東雲を寿海となせり初茜
うから揃ひて祝ふ屠蘇酒
六角の武者絵の風を飾るらん

神谷安子

護摩焚ける最中なりけり初不動
猿曳き囲む輪の中の友
床の間に早梅活けぬ匂やかに

雑賀千鶴子

水平線海空分かつ初日の出
船首を飾るお神酒蓬萊
猫走る鶯笛は孫ならん

蒲原志げ子

古九谷の鶏あざやかや初点前
玉砂利を踏み汲みし若水
牡丹雪旅を誘ふ友ありて

坂本孝子

袂より紅こぼしつ歌留多かな
汁粉の椀の揃ふ炊初
こち風にひよこの和毛そよぐらん

式田 和子

杉山 壽子

お迎へ黒子ふえて元氣の雑煮餅
初湯長々遊ぶ幼ら
下萌る岬に駿馬駆くるらん

篠原 達子

須田 智恵

酉年の絵馬賜りぬ初詣
祝太郎の酔うて候
花ミモザ溢るるばかり投げ入れて

下坂 元子

瀧川 雅代

手賀沼の初東雲や羽撃つもの
遠富士青き畦のたびらこ
ファミン子エルジニアの夢育てて

下鉢 清子

武村 利子

みはるかす山脈凜と今朝の空
海老を飾りし新装の床
鶏合せ手塩の一羽持ち寄りて

杉江 杉亭

橋 文子

初御空總帆揚げて日本丸
飾りを掠め飛ぶ信天翁
故郷の山河遙けく夢に見て

富田 正久

原田 千町

元旦の夕べ客なきまどみかな
俎始きさむ古漬
富士晴るるひと声高き鶏鳴に
酔眼こすり熊穴を出づ

中川 哲

百武 冬乃

初凧や湘南の空鷗飛ぶ
船起しすみ祝ふ直会
クロッカス萌ゆるとつ国夢に見て

中島 啓世

福井 隆秀

元日やふるさと清く閑もりぬ
喃語する子に春着ふんはり
桜貝標本箱に三つ置きて

中田 あかり

佛淵 健悟

新しき門にかかげる注連飾
実り豊かな万両の紅
阿夫利嶺に今年大雪積るらん

成田 玲子

峯田 政志

へのへののもへじの顔や初笑ひ
猫も加はる昼の正月
春雷に心気一転進むらん

真青に空より降りて初雀
春着の姉妹遊ぶ広縁
蕨餅益子の皿に盛られるて

初富士や潮滔々と四方の海
松吹く風に淑氣満つ里
老師さま毬と仔猫をふところに

初鶏の一声高き神の杜
恵方道ゆく善女善男
おらが春連句で和々々拡がりて

初凧や黄金の耀ひベイ東京
ノッポビルより恵方展望
長春花腕いっぱい抱へ来て

天地を岩戸開きに初日哉
受けし破魔矢の羽の純白
花の籠コーラスとなる歌ありて

初晴や比企の杣山幾重にも
ふくさ薬踏み遊ぶにはと
進級の子ののびやかに唱ひゐて

われ臥すも君辞す勿れ屠蘇年酒
声賑やかに恵方万歳
線となり点となり消ゆ鳥雲に

つん読の書もとのへて年初かな
厨にしるき七種の青
百千鳥街にあふるる世の中に

宝船露ひかせむ枕もと
飾り昆布の故国おもひつ
風光る地球局面新たに

歌垣の筑波の嶺に初明り
淑氣満ちたる老松の幹
春の夢白き巨船は岸壁に

村田 富美

ワープする魔女と初猫れんく星
こぞもことしもころも恋々
ちらちらと花降る里に君待ちて

矢崎 藍

初明りさし来る二十世紀
時をつくれる長き尾の鶏
父植ゑし梅が見頃とファックスに

山口 瑞枝

吉祥の雲たなびけり蓬萊山
初声聞こゆ村の老松
御恵み感謝の美酒を捧ぐらん

吉村 恵美子

霜柱さくさく田中の初日の出
御形はこべらあちらこちらと
エネルギークリーニング時代夢に見て

若尾 よしえ

(アイウエオ順)

歳旦の三つ物は、松永貞徳が承応元年の元日、時の將軍家綱を祝って詠んだのが始まりとされる。而後、これに倣って、正月吉日、宗匠の家に集まって三つ物を作り披露するのを、歳旦開きと言った。

三つ物は、立句・脇・第三で一巻となるのであるから、尋常の歌仙の中から三句を取り出したようなものではなく、歳旦三つ物と言われる甲斐がない。たとえば小さな車が小廻りがきくように、たった三句の中に歌仙・百韻のはたらきを持たせなければならぬ。それには、発句・脇・第三の中に、神祇・釈教・恋・地名・人名など、普通の表六句に禁忌となっているものも自由に詠みこむことができ、三句の中にいろいろのもの、ごたつかせないで取りこむことが肝腎である。

具体的には、発句新年、脇新年、第三は雑でも春又は秋でもよいが、春の場合は、春という字はなるべく用いないように注意する。第三に夏・冬を用いることは殆んどない。

連句 猫蓑作品集Ⅰ (一、五〇〇円)
連句 猫蓑作品集Ⅱ (一、七〇〇円)
連句 猫蓑作品集Ⅲ (近日刊行予定)

I・IIは残部僅少

「灰汁桶の」の巻鑑賞(Ⅱ)

東 明 雅

新畳敷ならしたる月かげに

野水 去来

(現代語訳) 新しい畳を敷きならべて、月見の小宴を張ると、客膳に十人前の盃を並べるのも嬉しいことである。

(付心・付味) 起情の句。新畳から移徒の祝い事と見て祝宴の状況を付けた。主人の満足感の照応・移り。

(転じ) 打越のわびしい気分から、明るいよろこびの気分転じている。

(補説) さかすきは、この場合、饗応の膳にひとつずつ配る引盃である。酒宴の時、昔は一座に一つかあるいは三つ組の盃などを順々に、序列に応じて廻し、順次飲んで一順させる方式であったが、いつの頃からか、「めいめい盃」(引盃)という、客人の膳毎につく小さな塗盃が用いられるようになった。十の盃は親子・兄弟などごく親しい仲に出された十個揃いのもので、十は物のみち足りて欠けぬ意である。

この句を人情自の句であると見ると、打越から三句自の句が続くことになる。前句をはさんで打越は佻しい生活を

描き、この句は楽しい生活を描き、そこに転じが十分あると考えたのであろう。また、強いて言えば、十箇の盃を並べた席には客も当然考えられるから、この句を自他半の句と解することも可能であろうか。

ならべて嬉し十のさかづき

去来 蕉

(現代語訳) 千年の齡を保つめでたいものをさまざま取り集めて子の日の賀筵を張る。一族が盃をならべて酌みかわすのもうれしいことである。

(付心・付味) 前句の酒宴を正月子の日の宴と見た付。(転じ) 打越と、おめでたい気分は変わっていないが、庶民階級の雰囲気は上流階級の雰囲気転じている。

(補説) 「千代経べき物を」は西行法師「山家集」の歌「ちせふべき物をさながらあつむとも君がよはひをしらんものかは」を踏まえている。千年の齡を保つめでたいものは、小松や若菜など「子日」の賀筵に用うるもの。「物を」を「物であるのに」の意に取る説もあるが、これでは反意

になって、せっかくのおめでたい気分がこわれおもしろくない。

元々「子日」は王朝時代の貴族の遊びで、新年初の子の日に、野に出て小松を引き、若菜を摘んで千代を祝う行事である。近世になってからは、実際に野に出て小松を引くことはなく、俳諧の季語として、子日草・初子・子の日・子の日の遊・小松引・子日宴などが残った。裕福な風流人が古代の行事に模して、子日宴を張ったものとするべきだろう。

この句、自の句とも考えられるが、子日宴は独りではなく、多くの一族の存在が考えられるから、これも自他半の句と考えてよいであろう。

千代経べき物を様々／＼子日して

鶯の音にだびら雪降る

蕉

(現代語訳) 野辺に出て、子の日の遊びに小松を引いていると、鶯の声が聞こえ、牡丹雪が降って来た。

(付心・付味) 其場の付。「類船集」によれば「子日」と「鶯の声」とは付合語。

(転じ) 打越の人情句から人情なしの句への転じ。打越と前句が古典的でやや重くするしに、これは俗にくだけ軽い調子・気分になっている。

(補説) 西行の「山家集」「子日しにかすみたなびく野辺に出て初鶯の声をききつる」、あるいは「古今和歌集」の「君がため春の野に出てでわかなつむ我衣手に雪はふり

(転じ) 王朝公卿風のどちらかと言えば静かな優雅の世界から、動的な近世武士の勇壮な景へと転じ、気分もすっかり変わっている。

(補説) 「乗出して」には、①人間が馬に乗って出る。②馬が駆け出そうとする。③馬が頭や頸を前に出す。この三通りの解があるが、作者去來の作風から見ても、一番正当な①とするのが穏当であろう。「肱に余る」は手にあまる。もてあます。制御できないの意であるが、その程度が問題である。俗に馬が騎乗者の意に従わないで暴走するのを、「引駈ける」あるいは「引駈けられる」というが、引駈けられたらそれこそ大変で、乗手は鶯の音どころではない。その点は、露伴の「肱に余るはただ吾が思ふやうにならぬを、優雅に且又馬上の姿情を具して云へるなり」(「評釈芭蕉七部集」という説に賛同したい。それ故に、騎乗の人も、手綱をさばく逞しい腕の力瘤まで見えるようだ、武辺だて一辺倒では、前句の風情にあわれない。銀鞍白馬の貴公子、紅顔の美少年とまでは言わなくとも、やはり凛々しい若武者と見たいのである。

乗出して肱に余る春の駒

摩耶が高根に雲のかゝれる

來

(現代語訳) 手にあまる勢いの春の駒を乗り出して行く

と、摩耶の山頂に雲がかかっているのが見える。
(付心・付味) 遁句・其場の付け。「三冊子」にこの付合を次のように説明している。

つつ」など、古歌の境地を取り上げながら、「だびら雪」という俗語を活かして、句の格を下げたところがおもしろい。

「だびら雪」は、淡雪・牡丹雪・綿雪・かたびら雪・だんびら雪・泡雪などとも言い、春の雪である。尤も古い季寄せ「増山井」(一六六三)には、十一月の項に「かたびら雪・たひら雪」が記載され、「をだまき」(一六九一)や「俳諧新式」(一六九八)にも同様で、その作例を見ても霰まじる帷子雪はこもん哉

佐保路なるかたびら雪やならさらし
など、「かたびら雪」は薄く降り敷いた雪を、夏の帷子になぞらえて言ったものであるのに対して、「たびら雪」の方は

ふるふるをおもひし花はたびら雪

貞徳

声なふて空行鶯や太平雪

政之

など、多く春季に降る水気を含んだ大粒の牡丹雪を指している。「三冊子」には「はびれ雪 かたびれ雪 みな大ひら雪のことをいふとなり」とある。

鶯の音にだびら雪降る

兆

乗出して肱にあまる春の駒

來

(現代語訳) 早春の野辺に遠乗りをすると、鶯が鳴き牡丹雪が降りかかってくる。駒は勇んで乗手の手に余るほどである。

(付心・付味) 起情の付け。前句の明かなくて活動的な気分に対して、勇ましい春の若駒は、よく響き合っている。

前句の「春の駒」と勇みかけたる心の余り、「摩耶が高根」と移りて、「雲のかかれる」とすすみかけて、前句にいひかけて付たる句なり

即ち、前句の勇みかけた気分が付句に移って、さらに「雲のかかれる」と展開したというので、前句の余情と響き合った付けである。

(転じ) 打越の「雪降る」に対して「雲のかゝれる」で、ともに人情なしの天象で、近景・遠景の差はあるものの、気分も転じのない三句がらみの句である。

鶯の音にだびら雪降る

摩耶が高根に雲のかゝれる

と殆んど同じ句型であるのも気になる。

(補説) 摩耶山は六甲山脈の一つの峯で、高さ約七〇〇米、山上に忉利天上寺があり、十一面観音を本尊とし、また仏母摩耶夫人を祀るので、仏母山・摩耶山と言う。二月初午・卯月八日・七夕・春秋の彼岸に参詣者多く、ことに近世期は、初午の日に飼馬をつれて参り、その無事を祈ったことが「滑稽雑談」(一七二三)にも記載されている。摩耶という名が馬屋と通うところから生まれた因縁でもあるうし、この付句の摩耶も、前句の「春の駒」から来ていることは明らかである。

馬追

付勝練習二十韻

東明雅

投句締切
4月20日

ふるさとや馬追鳴ける風の中
撫子残る月代の道

秋桜子
達子

付

- 治定 秋深し篆書一幅書上げて
- 佳作 1 小重陽黄瀬戸灰袖手にとりて
- 同 2 絵画塾巨き南瓜を囲みゐて
- 同 3 美術展出品準備もれもなし
- 同 4 香りよきマロングラッセ取り出して
- 同 5 茸飯蜂の子飯も楽しくて
- 同 6 ヘルシーと菌料理を編み出して
- 同 7 葡萄酒を醸す家業の友ありて
- 同 8 高館の階のきしみも秋ならん
- 同 9 受賞後を添水真近な茶室にて
- 同 10 口切や沸々たぎる湯の音に
- 11 アップルのパイは銀器に饗されて
- 12 行水の名残も昨日今日にして
- 13 夜学子の帰りて来る頃ならん
- 14 築守りの落鮎を焼く頃ならん
- 15 御自慢の厚物味の宿ならん
- 16 夜なべする仲間次第に減りて来て

よしえ
達子
健悟
美津
千雪
智子
美子
麻子
和弥
鋭太郎

- 17 泥染めの秋拾着てしとやかに
- 18 牧閉ちて家族一同爽かに
- 19 からからと鳴子の音もさびしくて
- 20 かへりみるハッ連峯は爽籟に
- 21 秋遍路後姿の姉に似て
- 22 教会の帰り二科展に立ちよりて

第三を付ける時、注意しなければならないことを列挙すると、

- ① 第三は発句・脇の境地から一転すること。
- ② 第三は丈高く、品位のある句が望ましい。
- ③ 発句が春・秋ならば第三も春・秋、発句が夏・冬の場合、第三は雑になる。(尤も歌仙の場合は第三も夏・冬とする方が多い)
- ④ 留めは、に留め・て留め・にて留め・らん留め・もなし留めなどが普通である。
- ⑤ さらに、もう一つ、第三には独得の第三体というものがある。

大山

秋の風鍛冶の研の通ひ来て

杉形

むら雀日和定むる声立てて

小山

みの作りみの作りさす雨止みて

※

※ この大山・杉形・小山の三法は、いずれも第三を丈高とする為の二章体である。

さて、発句・脇句は戸外の景、人情なしの句である。だから、これに変化をもたせ、転じをはかるには、室内の景そして人情の句がよい。

治定の句および佳作1・2・3はその条件を満たしている上に、丈高く、百句の中においても、第三の句だとはつきり分るものである。この四句がそれぞれ、篆書・黄瀬戸灰袖・絵画塾・美術展と、いずれも美術関係の句であることも、丈高くするに効果があったと思われる。そして1・2はともに大山体の二章体で、早速1を採用しようと思つたが、これは既に脇の句を取った一巡の人なので、同じ人をつけるわけに行かず残念であった。2は発句と違つて近代性があり、明るくておもしろいと思つたが、「巨き南瓜」がやや第三にしてはくだけすぎかと思われる。3は厳密には二章体の句とは言えないだろう。二章体でなければ絶対に悪いと言っているわけではないけれども、中七・下五はもっと別のことを言つて欲しかった。それで治定の句は、原句は「秋興の篆書一幅書上げて」であつた。これも二章体ではなかつたが、ちよつと一直すれば二章体になり得る。それで上五を勝手に変えさせていた。これはあまりよいことではないけれども、他に適当な句が見当らなかつた為の窮余の策である。捌きに免じて了承して欲しい。

佳作の4以下9までは、丈高いことにおいては治定の句、または佳作の1・3には劣るけれども、第三としての条件

にはずれていないので一応合格としたのである。これらもたとえ4「旅鞆マロングラッセ取り出して」、5「茸飯新築の家楽しくて」、6「異邦人菌料理を編み出して」などにすれば、原作よりもおもしろくなるだろうし、7も「葡萄酒を醸す家業の友訪ひて」、8「掛り人階のきしみも秋ならん」、9「賞受くる添水に近き茶室にて」などに直せば、第三として使えるのではなからうか。

10の口切は初冬の季語であり、また、「や」というような切字は発句以外に濫用すべきではない。11の句は「アップルのパイは銀器に饗されて」と、中七の真中で句切れになっている。第三はこのような句切れを嫌うのである。12この句も「行水の名残も昨日今日にして」と胴切れである。13発句・脇ともに夕方から夜の気分が滞っているから、夜学など出せば気分が転じない。14鮎は発句の馬追と異生類の打越である。15厚物味と言えは菊の花であらう。前句の撫子にスリッパであるから、普通なら許されるだろうが、表四句で名ある秋草を二つ、しかも続けて出すのは嫌う。16これも夜の気分が続く。17これは何かすてきな女性を連想させ、恋句めいている。18牧は田舎にあり、発句・脇と三句がらみになる可能性がある。19ここで音を出すと発句の馬追にさわるだろうし、特に鳴子は馬追鳴けると同字である。20これも発句のふるさとと気分が通い、三句がらみである。21遍路は釈教の句であらう。22教会も宗教に關係あるから駄目。

四句目は無季で人情の軽い句を出して下さい。

第7回 国民文化祭石川92連句大会

連句大会津幡ところどころ

下 鉢 清 子

宗祇が八賀やがを加る国の白き山Vと詠んだのは加賀の国のシンボルの白山であるが、その加賀の国は北陸の中心地、東は越中、北は能登、西は越前、南は飛騨と接する地である。元禄二年「おくのほそ道」の旅で加賀路に入った芭蕉は、金沢で弟子北枝と語り一笑の死を悼み、山中温泉で旅の疲れを癒しなどし、「山中三吟」を成すなどの多くの足跡を残しているが、加賀は京都や江戸とはまた異った絢爛たる文化の育ったところ、風雅の土が多く、また近代には多くの文学者を生み、独特の文化的風土の地である。

こうした歴史を持つ地で、平成四年十月二十四日から十一日間にわたって第7回国民文化祭・石川92が開催された。その中で連句行事の日程は二十八・九日の二日間、連句大会会場は加賀・能登・越中の分岐点に位置する津幡町で、人口二万七千人の三分の一は農業人という静かで美しい田園都市であった。大会前日の二十八日の史蹟巡りには七十名、続く前夜祭は百八十名、二十九日の連句大会当日には二百十余名という多数の連衆の参加があり、連句人の交流と半歌仙実作にと励みつつ、連句大会のテーマ「やまと言葉の奥義を探る」ことに貢献し合ったのである。私の津幡町行脚は大会前日の史蹟巡り俱利伽羅不動尊から

ら始った。とは書きながらも数日前にお聞きした明雅先生あきよしの、二十九日当日の立句八俱利伽羅や狹霧が襲ふ谿紅葉Vが見たしと、不動尊は通り抜け只管裏山へと急ぐ。余りの脱線振りの数名のために、津幡町の職員が先導して峠までご案内下さったが、お陰で火牛作戦の路を遠望し、翁の句碑八義仲のねぎめの山か月かなしVに対面し満足をしたひと時であった。「血相変えて何処へ行ったのかと思つた」と話題になった一齣であるが、その後は羽咋市の気多神社を経て、千里浜の風光を楽しみなどし、前夜祭の会場で上大田獅子舞、津幡民謡会の石川民謡づくしに酔つたのである。二十九日の連句大会会場は津幡町福祉センター。十時よりの開会式につづく表彰式には、第7回国民文化祭実行委員会会長賞に倉本路子「遣唐船」の巻、同石川県実行委員会会長賞に八角澄子「引鶴や」の巻、同津幡町実行委員会会長賞に百武冬乃「名草の芽」の巻が授賞し、その他多くの猫養会作品が秀逸や佳作に選ばれたことは嬉しかった。今もくっきりと、千里ヶ浜の落日の美しさ、マスコット「文化ちゃん」の短冊片手のお河童姿の愛らしさが目に残る。前年の千葉の係の一員として、連句の会を盛大に引き継いで下さった津幡の方々有難うと言うのみである。

国民文化祭実行委員会会長賞

遣唐船

倉本路子 捌・文

遣唐船往きし潮路やつちぐもり
肩をかすめてひらと燕
摘草の母子とき折見交して
玻璃戸に立てる影の誰やら
CDのシャンソン聞きつ仰ぐ月
新酒利酒いささかの酔

路子 千町 杉亭 政志 町 亭

江鮭えさ大津祭の御馳走に

そりあと青き男笑ひぬ
心中の傷をかくせる腕時計
寝返る度に憎さこみあげ
川涼みのつべらぼうも連れのうち
ぼつりぼつりと裸電球
冴ゆる月シベリア鉄道果しなく
咳こぼしつっ老の手仕事
「夢」といふ色紙もらひて掛ける壁
若貴人氣一瞬に消え
山峽に知られぬ花の咲き乱れ
ふんわり結ぶ春のスカーフ
平成四年三月二十五日
於 朝日カルチャーセンター

亭 町 町 亭 町 亭 町 亭 町 亭 町 亭

思いがけぬ喜び

津幡から「貴殿が捌かれた作品が入賞いたしましたので……」との知らせを戴いた時は、青天の霹靂とはこの事かとばかり驚きました。而も実行委員会長（三浦朱門）賞とのこと、この齢になつて思いも寄らぬ光栄なことで大層嬉しゅうございました。

この作品は朝日カルチャー教室で、初めて捌かせて頂いた時のものです。発句は、遣唐船の最後の寄港地、福江島で「あの島の間を過ぎるとあとは渺渺たる大海原……」と聞いた折の感動を詠みました。ペテランの連衆方が出される転じの効いた句に、迷つてうろろしている、秋元先生に「捌は席に落着いて」と注意され恐縮したことなど思い出されます。受賞のことを連衆（大先輩）へ電話報告、「エッ本当ですか、僕（の）の字一字でも嬉しいですよ」と政志さん、さすが俳諧師！と脱帽。未熟な捌を扶けて下さった皆様、まことに有難うございました。

又「作品集」の中では、春山洞先生に大変お褒めを頂き感激を一層深く致しました。然し一番喜んで下さったのは、明雅先生と正江先生です（一番びっくりなさったのもお二方では……）、両先生には「お陰様で」と百万遍も御礼を申し上げたい気持ちでございます。

表彰式に参加した二日間は夢の様でした。お世話くださった津幡や金沢の方々の御親切、あの暖さも一生忘れられないと思います。本当に有難うございました。

引鶴や

八角澄子捌・文

引鶴や急がぬ旅を七尾まで
靴にそっとひそむ春愁
焙炉師の揉みし茶の香の立つならん
隣部屋よりミシン踏む音
そぞろ寒月皓々と照らしるて
遊び散らせしままのべい独楽

秋味の湖上を見んと橋の上
ヴィオラのケース提げて足ばや
神父様おひげ丸帽笑みこぼれ
馬刺猪鍋純米の酒
農村の嫁のひでりをかこち合ふ
色浅黒く甘き体臭
ヨットの帆傾き隠すキスシーン
淡くかそけし夏富士の月
忘れじと思ひつ忘るけさのこと
ワープロで打つ般若心経
西行の庵に降りつぐ花吹雪
峽をななめにすがる飛びゆく
平成四年四月六日
於 新宿滝沢

澄子 利子 元子 雅代 一恵 利 元 同 恵 代 同 代 澄 利 元

能登はやさしや

引鶴や急がぬ旅を七尾まで
旅をあこがれる人間のひとりとして、旅の中でも「急がぬ旅」こそ旅の中の旅、理想の旅と思っている。勿論あの歌枕、この旧跡と日本はおるか世界中可能な限り見てみたいとの想いも持っているが高望みしても仕方がない。やはり好きな土地を一人か、限りなくひとりに近い二人でふらりと参りたい。

十数年前、「能登はやさしや土までも」とあった記事に触発されて奥能登一周旅行を思い立ち、金沢一泊の後七尾線に乗った。この旅は文字通り理想に近いのんびりした一人旅だった。二月末の某日、雪景色を想像して行ったのに、その年は暖冬で線路沿いにはペンペン草と菜の花が咲いていた。奥能登観光バスで輪島へ、そしてもう一度山あいを通る路線バスで宇出津へ戻った。

昨年、国民文化祭に出品する半歌仙を巻くことになって開催地の津幡町を地図で調べてみた。何とあの大好きな七尾線にあるではないか。

この思ひ出の七尾線の旅が発句になり、後は連衆の皆さんが、ああでもない、こうでもないとお智恵を絞って下さって思いがけなく受賞の栄に浴したわけである。
わが友と石川県には足を向けて寝るわけにはいかない。

第7回国民文化祭津幡町実行委員会会長賞

名草の芽

百武冬乃 捌・文

おのづから香にはほひけり名草の芽
北窓開く里の家々
白酒に兎らの歌声果もなし
手筐の中の刺繻取り出す
高原を友と騎りゆく宵の月
プラスチックの案山子くるくる

ハローウィン猫の尾を踏みとび上り
あのおてんばが美女に変身
桐箆守り刀を秘めて嫁く
義姉がまぶしい義弟十七
スフィンクス熱砂の町をF1で
織月浮かぶスコールのあと
奇しき事多き伝説読み継ぎぬ
鯛焼買って戻りくる父
医療費の控除に入歯役に立ち
夢といふ字をゆっくりと書く
航跡の曲る岬の花盛り
へたな鶯またも裏山
平成四年三月十一日
於 新宿

冬乃 杉亭 徒司 美津 麻子 千雪 津 麻 乃 津 亭 司 亭 乃 雪 津

助け舟をたよりに

連衆御一同を前に捌の席に就いた折の心持は未だに表現できません。この錚々たる面々を率いて十八句の詩の海を漕ぎ渡れるものやら。不安の波に溺れてしまいそう。でもこの方々なら、必ずや助け舟をお出し下さる筈。他力本願に頼ってともかく姿勢を正します。

まず連衆への敬意をこめて発句を。すぐに幸先よく窓が開かれ、可愛い歌声に励まされて手仕事を楽しむゆとりも出ました。付味に迷えばベテランならではの御助言に救われ、現代らしい軽さのうちに恋へ。美女に変身した姪を持つ捌が、ふと閃めく想を得て継がせていただきました。向付での屈折した恋情、こるり転じてF1に。こうして鯛焼へと続く運びは連句の面白さの典型と申せましょうか。
更に俳味ある病体も出て、捌も思わず知らず悠然たる人物を描くことができました。視界ひらけた岬の花、耳には微笑ましい鶯。

連衆の力量なしにこうした変幻ある詩情の展開は望めません。助け舟を乗り継いで、ゴールに辿りついた捌は、連衆御一同にただ熱き感謝を捧げるばかりでございます。

このたび思いがけなくも、第7回国民文化祭にて、この巻に「津幡町実行委員会会長賞」を賜りました。一卷を流れる詩情とそれを支える連衆の詩魂がこうした形で讃えられたことは、誠に嬉しく有難く思われます。捌はその大筋を決めるお役目を何とか果たすと云うに過ぎません。

新紅葉

東明雅捌

俱利伽羅や狹霧が襲ふ新紅葉
 徑七曲りのぞく昼月 東明雅
 高村俊子
 江鮭色つややかに炊きしめて 瀧川雅代
 急に激しく猫を追ふ声 山崎一恵
 西川柳史
 箔を打つ音にひかれて入る店 田中英子
 夏の暖簾に家の紋染め
 オープンカー横付けしたる同級生
 どちらにしよう恋のかけもち
 細腰を抱けば撓ふ統の肌
 蟾酒を酌む洛北の旅 俊
 雪吊りの真上に月の昇りけり 英
 父に戻りし宇宙飛行士 代
 我儘に育てて夢を托しをり 史
 電子ピアノで流す讚美歌 恵
 調剤を間違へ渡す老先生 俊
 蝶はひらひら人は浮き浮き 英
 海が見えお城が見えて花筵 史
 サイクリングは春風を切り 田村ゆう子

山彩る

秋元正江捌

山彩る俱利伽羅峠越ゆるかな 秋元正江
 棹くつきりと渡るかりがね 下鉢清子
 童話集読みやる窓辺月ありて 原田千町
 教壇に立つ準備完了 小山西置
 どこまでも生き甲斐求め励みけり 加藤湖月
 ざっくり編みし毛糸ジャケット 豊田好敏
 港町除夜の汽笛を鳴らす船
 高砂を舞ふ宝生の能
 缶詰に飽きたる猫をもてあまし
 エレベーターで握る左手
 後家さんに心もとろけ身もとろけ
 吉祥天女のうしろ梅雨寒
 苔清水月のコインの泛かぶらん
 定期検診まづは合格
 九十九折登りし果ての千枚田
 初の諸子で地酒酌み合ふ
 老幹に頼む花あり城下町
 絵巻に箔の霞ただよふ 月置

新走り

内田麻子捌

新走り一会の友と酌む夜かな 内田麻子
 汀を遠く照らす月影 佛淵健悟
 あにおとと競ひあきつを追ひかけて 紙谷湖秋
 同じところでソナタ間違ふ 上月淳子
 三世代住むビル空へ伸びて行き 奥村富久女
 特急すぎてあぢさるの揺れ 久保田夜虹
 妄執を包むに薄き夏衣
 噂ひそひそ嘘かまことか
 若武者のりえちゃん寄り切る恋土俵
 ハイテクカメラあら動かない
 剥落の観音拝む羽賀の寺
 尊厳死証明めて又冬
 顔見世の招き看板宵の月
 下駄にまつはる青い目の猫
 板前は客前にして魚さばき
 放歌高吟春泥を踏む
 佐保姫の深山の花に遊ぶらん
 種時く人の動き出す頃 悟

菊日和

式田和子捌

加賀染の袷や今日の菊日和 式田和子
 中島啓世
 雁渡し吹く空に昼月 金子容士
 落顰あつあつのまま運ばれて 島木悦子
 連吟終へて謡本閉づ 若松隆一
 留守録は笑ひこらへて聞くが常 津幡敬子
 雨にはだしの児等が喜ぶ
 竹人形鬼女が迫り来夏座敷 悦
 遠き笛の音川の辺り宿
 猿軍団レパートリーがひとつ増え 敬
 青髭男剃り跡に傷 世
 溶けさうなをんなを抱いて夢うつつ 一
 宇宙遊泳シャガールははや 世
 さりげなき石のくばりに冬の月 士
 爛酒しづかにのむべかりけり 世
 父祖の地に連句巻かんと集りぬ 敬
 かはずも吾も穴を出る頃 一
 ひとひらの花びらかかる僧の袖 悦
 小手をかざせる巡礼の列 士

時雨るる加賀

中川哲捌

ひとり来て時雨るる加賀の都かな 中川哲
 舟橋玉枝
 枝美しく張りし雪吊 武村利子
 母と子でピアノ連弾競ふらん 峯田政志
 犬にもおやつ用意する卓 朝倉一夫
 月出でて散居の村の明らかに 水野道代
 背戸のあたりに虫の鳴き初む
 義仲の菊人形と睨み合ひ 志
 単車相乗り飛ばす崖ぶち 子
 懐に忍ばれてゐる恋の文 哲
 「りえ」のハートも射止め優勝 枝
 平和への期待伝へる両陛下 代
 遺愛の緋鯉育つ大池 志
 貝塚の跡に上がりし月涼し 子
 おほじき遊び赤青黄色 夫
 痛む足いたはりつつも試歩伸ばす 代
 大山門に東風の吹きくるて 夫
 花びらを浮べて廻す茶碗酒 枝
 遙けき空の揚雲雀聞く 子

早稲の香

福井隆秀捌

早稲の香や芭蕉分け入る加賀の国 福井隆秀
 下坂元子
 背に負ひたる笠に蜻蛉 梅田利子
 月賞づるマロンングラッセ卓上に 竹中恭子
 積木の城を積みあぐる子等 出見世裕子
 あるかなきかに鳴れる風鈴 前田時余
 サングラス橋のほとりにバイク止め 元
 身をよぢらせて言ひ訳をする 利
 涙溜めじつと眼を見る酔ひの果て 裕
 甕に塩漬けたる株券 利
 利剣筍ぐ俱利伽羅不動凍てし月 元
 「熊に注意」と立札のあり 恭
 人の世に焚き続けたる登り窯 余
 ぎっくり腰がとんと直らず 裕
 楽屋までアプロポップス響きるて 元
 ひらひらと振る春のスカーフ 恭
 学び舎へくぐり抜けたる花の門 裕
 山も笑ひて霞たなびく 余